

アルフォンソ 10 世賢王『フエロ・レアル』における相続法

— 対訳と註解 —

青 砥 清 一

はじめに

本稿は、13世紀カスティーリャ＝レオン王国のアルフォンソ 10 世賢王¹⁾ (Alfonso X El Sabio, 在位 1252-1284 年) が編纂した『フエロ・レアル』 (Fuero Real) の相続法について取り上げる。はじめに本法典の編纂された経緯について概説した後、法律の制定および相続法に関する章について対訳および註釈を提示し、最後にアルフォンソ 10 世の法思想、および相続に関する世俗法と教会法との関連性について若干の考察を加えることとする。

1. 『フエロ・レアル』について

中世スペインでは、西ゴート王国の滅亡(711年)以来、長年にわたるレコンキスタ(国土回復運動)の過程において、国王の許諾および身分制議会(Cortes)の承認の下で局地法(fueros)が発達した。そのため法の地域的多様性が過度に拡大し、裁判所は王国共通の訴訟法を欠き、地方ごとに異なる判例や慣習に基づき裁判が行われ(Sainz Guerra 2008: 204)、いずれの当事者の属人法によるべきか決定するための手続きが複雑化した(Vinogradoff 1909: 14-15)。

アルフォンソ 10 世賢王は、レコンキスタを大幅に推し進めた父王フェルナンド 3 世の遺志を引き継ぎ、平定後の領土を統治するため大規模な立法事業を展開した。旧来のゲルマン的慣習法からローマ普通法への転換を図り、教会権力への介入、君主との合意に基づく封建制度の普及、地方議会の統合、

および税制・行政改革を敢行し、王権の基盤を固めようとした。このような政治的背景の下、『フエロ・レアル』、『エスベクロ』(Espéculo)²⁾、『七部法典』(Las Siete Partidas)³⁾を編纂した。

アルフォンソ 10 世は、1254 年に地方特権の廃止命令を発し、1255 年から『フエロ・レアル』をアギラル・デ・カンボオ、バリャドリッド、ブルゴス、サアゲン、ソリア等の諸都市に譲与していった (Ayala Martínez 2008: 204)。その目的は、都市法の統一、地方特権の制限、および法の欠缺の補充にあった。しかし、国王の任命する裁判官に重大な権限を許与する革新的な法制度に対し、従来の特権や慣習法を享受していた諸侯・都市が激しく抵抗したため、王国全土に普及させることはできなかった (González Jiménez 2004: 90-96)。『フエロ・レアル』は 1272 年に一旦廃止されるものの、1348 年アルフォンソ 11 世正義王 (Alfonso XI El Justiciero, 在位 1312-50 年) のアルカラ勅令により効力を回復する。その後、『トロ法』(Leyes de Toro, 1505) および『ヌエバ・レコピラシオン』(Nueva Recopilación, 1567) に採録された (山田 1992: 130)。

『フエロ・レアル』は、次の 4 つの篇により構成される。本稿の主題である相続法は第 3 篇に収録されている。

第 1 篇：カトリック教会、王制、法律、裁判官、公証人、訴訟代理人、
訴訟物

第 2 篇：訴訟法

第 3 篇：婚姻法、相続法、契約法

第 4 篇：棄教者、ユダヤ教徒、刑法

主な法源は、『リベル・ユディキオルム』(Liber Iudiciorum)⁴⁾、『ソリア都市法』(Fuero de Soria)⁵⁾、『グレゴリウス 9 世教皇令集』(Decretales D. Gregorii Papae IX) およびローマ法である (Pérez Martín 2005: XII-XVIII)。

2. 対訳と註釈

2.1 アルフォンソ 10 世の法思想

LIBRO PRIMERO

TITULO VI.

DE LAS LEYES E DE SUS ESTABLECIMIENTOS.

LEY I.

La ley ama e enseña las cosas que son de Dios, e es fuente de enseñamiento, e maestra de derecho, e de justicia, e ordenamiento de buenas costumbres, e guiamiento del pueblo e de su vida, e es tan bien para las mugeres como para los varones, tambien para los mancebos como para los viejos, tan bien para los sabios como para los non sabios, asi para los de la cibdat como para los de fuera, e es guarda del rey e de los pueblos.

第一篇

第六章

法律およびその制定について

法一

法律とは、神に属する事柄を慈しみかつ教え示すもの、法と正義を論ず源泉にして模範、善き慣習の規則、人民とその生活の手本であり、老若男女、賢き者と賢くない者、都市の住民にも郊外の住民にも等しく善きものであり、そして国王と臣民を保護するものである。

【訳註】e, et「そして、～と～」(現西 y)。enseñamiento「教え諭すもの、教義」(現西 enseñanza)。guiamiento「導くもの、手本」(現西 guía)。muger「女、妻」(現西 mujer)。cibdat「都市、街」(現西 ciudad)。

LEY II.

La ley debe seer manifesta que todo ome la pueda entender, e que ninguno non sea engañado por ella, e que sea conveniente a la tierra e al tiempo, e sea onesta, e derecha, e egual, e provechosa.

法二

法律は、あらゆる者がこれを理解することができ、何人もこれにより欺かれず、土地と時代に適合し、なおかつ誠実にして正当、平等にして有益なものとなるよう表現されなければならない。

【訳註】**ome**「人、男」(現西 hombre)。**non**「～ない」(現西 no)。**onesto**「誠実な、正直な」(現西 honesto)。**equal**「平等な」(現西 igual)。* 13世紀カスティーリャは、キリスト教徒、ユダヤ教徒、ムスリムの共存する多文化社会であった。それぞれの聖典の言語(ラテン語、ヘブライ語、アラビア語)が存在するなかで、カスティーリャ語は三者の話す共通語であった。法二において「法律は、あらゆる者がこれを理解することができ」とあるが、書き言葉がラテン語であった中世キリスト教社会において、アルフォンソ10世が世俗語を法典の書記言語に使用した背景には、カスティーリャ語が王国内の誰にでも分かる共通語であったことが一因にある。

LEY III.

Esta es la razon que nos movió para fazer leyes, que la maldat de los omes sea refrenada por ellas, e la vida de los buenos sea segura, e los malos dejen de mal facer por miedo de la pena.

法三

余を法律の定立へと駆り立てた理由とは、人々の悪事が法律により抑制され、善人が安全に暮らし、そして悪人が刑罰を恐れて悪事を止めるようにするためである。

【訳註】**nos**「私達、(尊敬の複数 *royal we*) 余、朕」(現西 nosotros)。**fazer, facer**「する、作る、(法律を)定立する」(現西 hacer)。**maldat**「悪、悪事、不正」(現西 maldad)。

LEY IV.

Todo saber esquivia a non saber, ca escripto es que qui non quiso entender, non quiso bien facer. Et por ende establecemos, que ninguno non piense de mal facer por que diga que non sabe las leyes nin el derecho, ca si ficiere contra ley, non se puede escusar de la culpa por non saber la ley.

法四

全てを知り、無知を避けること。分別を欲しなかった者は善き行いを欲しなかったと聖書に記されているのだから。したがって何人も法律や法を知らないと主張することにより悪事を実行しようなどと思ってはならないものと定める。即ち、法律に違反すれば、法を知らないという理由で罪責を免れることはできない。

【訳註】**ca**「というのは、なぜなら」(現西 *porque*)。 **escrito es**「記されている」(現西 *escrito*) * 中世ヨーロッパにおいて「書かれている」といえば一般に聖書を指す。 **por ende**「したがって、それゆえ」(現西 *por tanto*)。 **ficiere**「する」*fazer* (*facer*) の接続法未来三人称単数形(現西 *hiciera*) * 接続法未来は現在・未来について実現が不確かな事柄を指した。現代では日常使用されないが、法文等にみられる。 **excusarse**「免れる、弁解する」(現西 *excusarse*)。

LEY V.

Bien sofrimos e queremos que todo ome sepa otras leyes por ser mas entendudos los omes e mas sabidores, mas non queremos que ninguno por ellas razone nin judgue, mas todos los pleitos sean judgados por las leyes deste libro, que nos damos a nuestro pueblo, e mandamos guardar. Et si alguno adujiere libros de otras leyes en juicio para razonar o para judgar por él, peche quinientos sueldos al rey. Pero si alguno razonare ley que acuerde con las deste libro, e las ayude, pueda facer e non haya pena.

法五

人民がさらなる判断力と智慧を得るためであれば、皆が他の法律を知ることが余は甘受し、そう欲するが、何人もその法律により論証や審判を行うのではなく、余が臣民に授け、その遵守を命じる本法典の法律により全ての訴訟が裁かれることを欲する。裁判において論証または審判をするため他の法書を適用した者がいる場合、罰金五〇〇スエルドを国王に納めるものとする。しかし、本法典の法律と合致する法律を論証し、これを援用するならば、そうしてもよく、処罰されないものとする。

【訳註】 **sofrimos**「苦しむ、甘受する」*sofrir* (現西 *sufrir*) の直説法現在一人称複数形。 **entendudo**「理解された、判断力のある」(現西 *entendido*)。 **sabidor**「学識のある、賢い」(現西 *sabio*)。 **mas**「しかし、だが」(現西 *pero*)。 **judgue**「裁く、判断する」*judgar* (現西 *juzgar*) の接続法現在三人称単数形。 **deste libro**「本法典の」(現西 *de este libro*) * *de* と *este* の縮約形。

adujiere「もってくる、提出する、適用する」**aduzir** (現西 *aducir*) の接続法未来三人称単数形。
peche「(罰金・税金等を)支払う、納める」**pechar** の接続法現在三人称単数形。**sueldo**「スエルド」*中世カスティーリャの貨幣で、12 ディネーロ (*dinero*) に値する：1 ディネーロ = 2 コルダード (1/4 が銀、3/4 が銅の貨幣 *cordado*)、5 スエルド = 1 マラペディ (*maravedi*)。

2.2 相続法

AQUI COMIENZA EL LIBRO TERCERO.

TITULO VI.
DE LAS HERENCIAS.

LEY I.

Todo ome que ovier fijos o nietos, o den ayuso de muger de bendicion, non pueda heredar con ellos otros fijos ningunos que aya de barragana; mas del quinto de su aver mueble e raiz puedalos dar lo que quisiere.

ここにて第三篇が始まる。

第六章 相続について

法一

祝福された妻の子、孫またはそれより下の卑属者のいる男は皆、その子らとともに妾腹の子を相続人に指定し得ないものとする。だが、自己の動産および不動産の五分の一については随意に分与し得るものとする。

【訳註】**ovier**「持つ」**aver** (現西 *haber*) の接続法未来三人称単数形 (語尾 *-e* 消失) *中世カスティーリャ語では *tener* と *aver* はいずれも「持つ」を意味する動詞として共存していたが、語彙アスペクト上の対立があった。前者が「所持している」という継続アスペクト動詞であったのに対し、後者には「獲得する、入手する」という起動アスペクト動詞としての機能があった。近代以降、*aver* は「持つ」の意味を失い、完了助動詞および存在動詞の *haber* となる。**fijo**「子、息子」(現西 *hijo*)。 **den ayuso, dent a ayuso**「それより下の」*den* (*t*) (現西 *de alli*)、*ayuso* (現西 *abajo*)。 **muger de bendicion**「祝福の妻、正妻」。 **aya**「持つ」*aver* の接続法

現在三人称単数形。**lo que quisiere**「欲するだけ、意のままに、随意に」。

Et si fijos o nietos, o dent a ayuso non ovier de muger de bendicion, nin otros fijos que ayan derecho de heredar, pueda facer de todo lo suyo lo que quisiere, de guisa que el rey su derecho non pierda, e nol pueda enbargar padre nin madre, nin otro pariente ninguno.

祝福された妻の子、孫またはそれより下の卑属者も、その他相続権を有する子もいない場合、国王が王税を損失しない程度に、自己の全財産を随意に処分し得るものとし、父親、母親ないしその他いかなる親族者もその処分を妨げ得ないものとする。

【訳註】**de guisa que** + 接続法「～するように、～する程度で」**guisa** (現西 *manera, modo*)。 **nol pueda enbargar**「それを妨げ得ない」* **nol** は **no** と **lo** の縮約形。

Et si ome qualquier muriere sin manda, e herederos non oviere asi como sobredicho es, el padre e la madre hereden toda su buena comunalmiente: et si non fuer vivo mas de el uno, aquel lo herede: et si non oviere padre nin madre, heredenlo los avuelos o dent arriba en esta guisa misma: et si ninguno destos non oviere, heredenlo los mas propincos parientes que oviere, como son hermanos, o sobrinos fijos de hermanos, o dent ayuso.

遺言なく死亡した故人において上記の如く相続人がいない場合、父親および母親が共同でその全財産を相続するものとする。その一方が生存していない場合は、他の一方がこれを相続するものとする。父親も母親もいない場合は、祖父母またはそれより上の尊属者が上記の如くこれを相続するものとする。これらの者が皆無の場合、兄弟、甥姪またはその卑属者等の最近親者がこれを相続するものとする。

【訳註】**manda**「遺言、遺贈」。 **buena**「財産、相続財産」。 **comunalmiente**「共同で」(現西 *en común, comúnmente*)。 **fuer**「～である」**ser**の接続法未来三人称単数形(語尾 **-e** 消失)。 **ninguno destos**「これらの何者も～ない」* **destos** は **de** と **estos** の縮約形。 **propinco**「近い」(現西 *próximo, cercano*)。

LEY II.

Si ome soltero con muger soltera ficiere fijos, e despues casar con ella, estos fijos sean herederos.

法二

独身の男が独身の女と子を作り、その後同女と結婚した場合、当該子は相続人になるものとする。

【訳註】未婚の男女が儲けた子であっても、その男女が爾後に結婚すれば相続権を得る。

LEY III.

Si el que muriere dexar su muger preñada, e non oviere otros fijos, los parientes propincos del muerto en uno con la muger escrivan los bienes del muerto antel alcalle, e tengalos la muger.

法三

男が妊婦を遺して死亡し、ほかに子がいなければ、その故人の最近親者が同女とともに判事の面前で故人の遺産を記録し、同女が遺産を管理するものとする。

【訳註】**dexar**「残す、遺す」(現西 dejar)。**alcalle**「判事」。**tengalos**「それらを管理する」* tenerの接続法現在三人称単数形 tenga の語尾に直接目的格人称代名詞 los が付いたもの(現西 los tenga)。

Et si despues nasciere fijo o fija, e fuer bautizado, aya todos los bienes del padre: et porque non se pueda facer engaño en la nascencia del fijo o de la fija, el alcalle con los parientes sobredichos ponga dos mugeres bonas al menos que esten delante a la nascencia con lumbre, e non entre y otra muger a aquella ora, fuera aquella que la oviere a servir a la paricion.

その後男子か女子が生まれ、洗礼を受けたならば、父親の財産を全て取得するものとする。男子または女子の誕生において詐術が用いられ得ないよう、判事は上記親族者とともに少なくとも二名の善良な女を指名し、明かりを灯して出産に立ち会わせるものとする。その際、助産婦を除き、その他の女はそこに立ち入らないものとする。

【訳註】**nasciere**「生まれる」nacer (現西 nacer) の接続法未来三人称単数形。**engaño**「詐術」

* 赤ん坊のすり替え等を防止する。**nascencia**「誕生、出産」。**bono**「良い、善良な」(現西 bueno)。**delante a**「～の前に」(現西 delante de)。**a aquella ora**「その時間に、その際」ora (現西 hora)。**aquella que la ovire a servir a la paricion**「彼女の分娩を手伝う女、助産婦」。

Et esta sea bien catada que non pueda facer engaño; et si la criatura muriere ante que sea bautizada, hereden su buena quel pertenescie los parientes mas propincos del padre e non la madre.

この助産婦は、詐術を用い得ないよう、確と監視されるものとする。幼児が洗礼を受ける前に死亡した場合、その幼児に帰属していた財産は母親でなく父親の最近親者がこれを相続するものとする。

【訳註】**catado**「見られた、監視された」catar (現西 mirar) の過去分詞。**ante que sea bautizada**「洗礼を受ける前に」。**pertenescie**「帰属していた」pertenescer (現西 pertenecer) の直説法線過去三人称単数形 * **quel** は関係代名詞 **que** と間接目的格人称代名詞 **le** の縮約形。

LEY IV.

Si ome que ovier muger casar con otra, e ovier fijos della, si esta con quien casa non sopier que él era casado, estos fijos sean herederos, e ella aya la meytad en los bienes que ganaren de consouno.

法四

妻のいる男が別の女と結婚し、その女との子を儲けた場合、男が既婚者であることを重婚相手の女が知らなかったならば、その子は相続人となり、同女は夫婦が共同で得た財産の半分を取得するものとする。

【訳註】**sopier**「知る」saber の接続法未来三人称単数形 (語尾 -e 消失)。**meytad**「半分」(現西 mitad)。

Et si por aventura lo ella sabie, los fijos non sean herederos: et esta que a sabiendas casó con marido ageno, sea metida con todos sus bienes, si fijos lexitimos non ovire, en poder de la muger que avie aquel marido, e faga della e de los bienes lo que quisiere, fuera que non la mate.

同女が情を知っていたならば、その子は相続人にならないものとする。情を知りつつ他人の夫と結婚した同女は、嫡出子がいなければ、自己の全財産と

ともに夫の元妻の支配下に入れられ、そして元妻が同女とその財産を意のままに処分するものとする。但し、同女を殺めてはならない。

【訳註】**sabie**「知っていた」**saber**の直説法線過去三人称単数形。**ageno**「他人の、よその」(現西 *ajeno*)。**lexítimo**「嫡出の、適法な」(現西 *legítimo*)。**avie**「持っていた」**aver**(現西 *haber*)の直説法線過去三人称単数形。**faga** (de)「(～を) 処分する」**fazer, facer**の接続法現在三人称単数形。**fuera que**「～を除き、但し」。

LEY V.

Todo ome que non ovier fijos de bendicion e quisier recebir alguno por fijo e heredarlo en sus bienes, puedalo facer. Et si por aventura despues ovier fijos de bendicion, hereden ellos e non aquel que rescibió. Et esto mismo sea por el fijo de la barragana, que fue recibido por fijo e heredero.

法五

嫡出子のいない男が何者かを子として迎え入れ、自己の財産を相続させるのならば、そうしてよい。もしやその後嫡出子を儲けた場合、嫡出子が相続し、前に受け入れた子是否とする。このことは、子および相続人として受け入れられた妾腹の子についても同じとする。

【訳註】**fijo de bendicion**「祝福の子、嫡出子」。**recebir**「受け取る、迎え入れる」(現西 *recibir*)。**rescibió**「受け入れた」**rescibir**の直説法点過去三人称単数形
* 嫡出子のいない男性が養子を迎えた場合、その養子は相続権を得るが、のちに養父に嫡出子が生まれたら相続権を失う。

LEY VI.

Si el marido o la muger muere, el lecho que avien cotidiano finque al bivo, e si se casare tornel a particion con los herederos del muerto.

法六

夫または妻が死亡した場合、日常保有していた寢床は生存している者のもとに残るものとする。そして再婚した場合、故人の相続人との分割に付されるものとする。

【訳註】**finque**「残る」**fincar**(現西 *quedar*)の接続法現在三人称単数形。**bivo**「生きている」(現西 *vivo*)。**tornel**「それを返す、付す」* **tornar**の接続法現在三人称単数形 *torne* と直接目的格人称代名詞 *lo* の縮約形(現西 *lo torne*)。

LEY VII.

Si el muerto dexare nietos que an derecho de heredar, quier sean de fijo quier de fija, e ovier mas nietos del un fijo que del otro, todos los nietos de parte del un fijo hereden aquella parte que heredaríe su padre si fuese bivo e non mas, e los otros nietos de parte del otro fijo, maguer sean mas pocos, hereden todo lo que su padre heredaría.

法七

故人が息子の子であれ娘の子であれ、相続権を有する孫を遺した場合、その一方の子の孫よりも他方の子の孫のほうが数に優るとしても、多数方の孫達は父親が生きていれば相続したであろう持分のみを全員で相続し、もう一方の子の孫達は、たとえ数に劣っても、自己の父親が相続したであろう持分を全て相続するものとする。

【訳註】**dexare**「残す、遺す」**dexar**（現西 *dejar*）の接続法未来三人称単数形。**an**「持つ」**aver**の直説法現在三人称複数形。**quier... quier**「…であれ～であれ」* *quiera*（*querer* 接続法現在三人称単数形）の語尾消失形。**del un fijo**「その一方の子の」* *el otro* と対比させて不定冠詞 *un* の前にも定冠詞 *el* が置かれている。**heredaríe**「相続したであろう」*heredar* の直説法過去未来三人称単数形* 現代語と同じ形の *heredaría* もあとで生起するように、表記の揺れがみられる。**maguer**「(+ 接続法) たとえ～であっても」（現西 *aunque*）。* いずれの孫も親等が同じであるから、同等に相続権を保護される。甥姪に関しても法一三に同様の規定がある。

LEY VIII.

Si a la ora que moriere el padre e la madre, o qualquier dellos, alguno de los hijos non fuere en la tierra, e el otro fijo que y fuer tomar e se apoderar de la buena que les pertenesce por herencia; quando quier que viniere el hermano que non era en la tierra, entre en aquella buena, e non le pueda decir el hermano que ante se apoderó, que salga de aquella buena por que él era tenedor, mas tenganla de souno fasta que la partan. Et esto mismo sea de la herencia que les vinier de avuelo o de avuela, o de otra parte que an derecho de heredar de consouno.

法八

父親と母親、またはそのどちらか一方が死亡したときに、子の一人が国外にいて、その他の国内にいる子が相続権により両者に帰属する財産を取得し支配した場合、国外にした兄弟がいつ帰国しようが、当該財産の占有に入るも

のとするが、先に支配権を得た方は右兄弟に対し、当該財産を占有していたことを理由に当該財産から離脱するよう主張し得ず、分割するまで共同でこれを管理するものとする。このことは、祖父もしくは祖母に由来する相続財産、または共同で相続権を有するその他の持分についても同じとする。

【訳註】y「そこに」(現西 ahí)。**se apoderar**「支配する、支配権を得る」apoderarseの接続法未来三人称単数形。**fasta**「～まで」(現西 hasta)。**vinier**「来る、由来する」venirの接続法未来三人称単数形。

LEY IX.

Si el marido e la muger ficieren hermandat de sus bienes desde que fuer el año pasado que casaren en uno, non aviendo fijos de consouno nin de otra parte que ayan derecho de heredar, vala tal hermandat. Et si despues que ficieren la hermandat ovieren fijos de consouno, non vala la hermandat: ca non es derecho que los fijos porque son fechos los casamientos sean deseredados por esta razon.

法九

夫と妻が結婚して一年が経過した後に二人の共同財産につき組合を結成した場合、二人に共同で儲けた子がおらず、相続権のある持分も有していなければ、その組合は効力を有するものとする。組合を結んだ後に共同の子が生まれた場合、その組合は効力を有しないものとする。というのは、婚姻が成立しているので、子がこのような理由により相続権を奪われるのは正当でないから。

【訳註】**desde**「～してから」(現西 desde que)。**vala**「効力を有する」valerの接続法現在三人称単数形。**hermandat**「兄弟関係、組合、結社」(現西 hermandad) *共同の子のいない夫婦間で結成された共同財産管理組合は、共同の子の出生により効力を失い、その子が父母の共同財産を相続する。**fecho**「なされた、成立した」(現西 hecho)。

LEY X.

Quando alguno moriere sin manda, los hermanos egualmientre hereden con las hermanas, asi en la heredad del padre como de la madre, como de los otros parientes si son en igual grado. Otrosi mandamos, que si el que muere sin manda non dejar fijos nin nietos, e deja avuelos del padre e de la madre, el avuelo de parte del padre herede lo que fue del padre, e lo de parte de la madre heredelo el que fue de la madre; e si él avie fecho algunas ganancias, amos los avuelos hereden de consuno egualmientre.

法一〇

人が遺言なく死亡した場合、父親および母親、ならびに同じ親等であればその他血族者の相続財産と同様、その兄弟は姉妹とともに平等に相続するものとする。また、遺言なく死亡した者が子も孫も遺さなかったが、父方および母方の祖父を遺した場合、父方の祖父は父親のものであった財産を相続し、母方の祖父は母親のものであった財産を相続するものとする。故人が何らかの収益をしていた場合、双方の祖父が共同で等しく相続するものとする。

【訳註】 **los hermanos egualmientre hereden con las hermanas**「兄弟は姉妹とともに平等に相続する」＊相続に関しては親等の等しい兄弟姉妹間に性差がない。**lo que fue del padre,... el que fue de la madre**「父親のものであった財産、…母親のものであった財産」＊直系卑属のいない故人の父親および母親がすでに死亡している場合、それぞれの祖父が自己の子の相続分につき孫の遺産を代襲相続する。**avie fecho**「していた」fazer (現西 hacer) の直説法過去完了三人称単数形。**amos**「双方、両者」(現西 ambos)。

LEY XI.

Todo ome o toda muger que orden tomare, pueda facer su manda de todas sus cosas fasta un año conplido, e si ante del año non la ficiere, el año pasado non la pueda facer, mas sus fijos hereden todo lo suyo, e si fijos o nietos o dent ayuso non ovier, heredenlo los parientes mas propincos.

法一一

修道会に入信した男または女は皆、一年以内であれば自己の全財産の遺贈を行い得るものとする。一年以内に遺贈をしなかった場合、一年が過ぎた後では遺贈を行い得ず、子が全財産を相続するものとする。子、孫またはそれ以下の卑属者がいなければ、最近親者がこれを相続するものとする。

【訳註】 **fasta un año conplido**「満一年まで、一年以内」**conplido**「(年月が) 満たされた、過ぎた」(現西 cumplido) ＊七部法典によれば、修道士は固有財産を所有することができない(第一部第七章法二)。また、入信後一年間は見習い期間中とされる(第一部第七章法三)。つまり修道誓願を立てる前であるので、本規定により財産の遺贈が認められる。

LEY XII.

Quando el ome que ovier fijos de una muger, casar con otra que ovier fijos de otro marido, e amos ovieren fijos de consouno, si el marido o la muger muriere, los fijos que fueren de aquel muerto partan comunalmiente toda su buena.

法一二

妻との子を持つ男が、他夫との子を持つ別の女と結婚し、そして両者が共同の子を儲けたとき、かかる夫または妻が死亡したならば、故人の子供達はその全財産を共同で分割するものとする。

Et si alguno de los hermanos que fueren de padre e de madre moriere sin heredero e manda non ficiere, los otros sus hermanos que fueren de padre e de madre hereden toda su buena, e si fueren hermanos de seños padres o de señas madres, cada uno de los hermanos herede la buena de su hermano quel vino del padre o de la madre de que son hermanos.

父親と母親を共にする兄弟の一人が相続人なく死亡し、なおかつ遺言をしなかった場合、父親と母親を共にするその他の兄弟が故人の全財産を相続するものとする。父親または母親のみ共にする兄弟である場合、かかる兄弟は、それぞれの父親または母親に由来する兄弟の財産を相続するものとする。

【訳註】seños「それぞれの、めいめいの」(現西 sendos)。

Et si algunas ganancias fizo el muerto de otra parte, los otros sus hermanos partanlas de consouno comunalmientre.

片親の異なる亡き兄弟が何らかの収益をした場合、その他の兄弟と一緒に共同でこれを分割するものとする。

LEY XIII.

Sy el que moriere sin manda e sin herederos naturales ovriere sobrinos fijos de hermano o de hermana por mas propincos, todos partan la buena del tio o de la tia por cabezas, maguer que los sobrinos del un hermano sean mas que del otro, ca pues eguales son en el grado, eguales deben seer en la particion. Et esto mismo sea de los primos, o dent ayuso, que ovieren derecho de heredar lo del muerto.

法一三

遺言なく、なおかつ自然の相続人なく死亡した者に、近親者として兄弟または姉妹の子たる甥姪がいた場合、たとえ一方の兄弟の甥姪が他方の兄弟のそれよりも数に優っているとしても、おじまたはおばの財産を全員で頭割りに

するものとする。親等が等しいのだから、分割においても等しくなければならない。このことは、故人の財産を相続する権利を有するいとこまたはそれ以下の卑属についても同じとする。

【訳註】sy「もし」(現西 si)。

LEY XIV.

Toda cosa que el padre o la madre diere a alguno de sus fijos en casamiento, sea el fijo tenuto de lo adocir a particion con lo otros hermanos despues de la muerte del padre o de la madre que gelo dió: et si amos gelo dieren de consouno, e el uno dellos moriere, el fijo sea tenuto de tornar a particion la meytad de lo quel dieron en casamiento, e si amos morieren, torne todo quantol dieron a particion con los hermanos.

法一四

父親または母親が子の結婚に際して与えるあらゆる財産について、その子は当該財産を与えてくれた父親または母親の死後、他の兄弟とともにこれを分割に付す責任を負うものとする。両親が共同で子に財産を与え、その一方が死亡した場合、その子は結婚に際して与えられた財産の半分を分割に付す責任を負うものとする。両親が死亡した場合、与えられた全ての財産を兄弟との分割に付すものとする。

【訳註】**sea el fijo tenuto de lo adocir a particion**「子はそれを分割に付す責任を負う」**ser tenuto de**「～の責任を負う」(現西 *ser tenido de*)、**adocir**「もっていく、もってくる、付す」(現西 *aducir*)。 **gelo dió**「彼にそれを与えた」(現西 *se lo dio*)。 **lo quel dieron en casamiento**「結婚に際して彼に与えられたもの」* *quel* は関係代名詞 *que* と間接目的格人称代名詞 *le* の縮約形。

LEY XV.

Quando alguno ficiere heredero a aquel a qui devie alguna cosa o quel era fiador, si recibier la herencia, pierda la demanda que avie contra él, o contra sus bienes, mas si tal fuer que non fizo manda porque era su propinco, si heredare con otros, entreguese primero de su debda, e despues partan lo que dent fincare.

法一五

人が何らかの債務を負っていたかまたは自己の保証人になっていた者を相続

人に指名した場合、かかる相続人は、相続財産を受け取ったならば、被相続人またはその財産に対して有していた請求権を失うものとする。だが、被相続人の近親者であったが故に遺贈されず、他の共同相続人とともに相続した場合、先ずは被相続人の債務を弁済され、その後そこから残った財産を共同相続人が分割するものとする。

【訳註】**quando**「～するとき」(現西 *cuando*)。 **pierda la demanda que avie contra él**「かかる相続人は、(…)被相続人(…)に対して有していた請求権を失うものとする」* *perder* の主語は *alguno* (被相続人)。 *él* は相続人(被相続人の債権者または保証人)を指す。

LEY XVI.

Defendemos que ningun clerigo nin lego non pueda en vida nin en muerte, judío, nin moro, nin herege, nin ome que non sea cristiano facer su heredero, et si alguno lo ficiere non vala, e el rey herede todo lo suyo.

法一六

聖職者も世俗信者も、存命中であれ臨終であれ、ユダヤ人、モーロ人、異端者、およびキリスト教徒でない者を自己の相続人に指名することを禁ずる。もし指名したとしても効力を生ぜず、国王が被相続人の全財産を承継するものとする。

【訳註】**herege**「(カトリックの教義から外れた)異端者」(現西 *hereje*)。

LEY XVII.

Maguer que el fijo que non es de bendicion non debe heredar segund que manda la ley: pero si el rey le quisiere facer merced, puedel facer legítimo e será heredero tanbien como si fuese de muger de bendicion: ca asi como el apostóligo a poder lleneramente en lo espiritual, asi lo a el rey en lo temporal: et como el apostóligo puede legitimar a aquel que non es legitimo para aver ordenes e beneficio, asi lo puede legitimar el rey para heredar e para las otras cosas temporales.

法一七

嫡出でない子は、法律の定めるところに違ひ相続人にならないとはいえ、国王がその子に慈悲をかけるならば、その子を嫡出とすることができ、その子は正妻の子であるかの如く相続人にもなることとする。教皇が教会の事柄に

において十全に権力を有するのと同様、国王は世俗の事柄において十全に権力を有する。そして教皇が聖職位および聖職禄の取得のため嫡出でない者を嫡出と認め得るのと同様、国王もまた相続およびその他俗事のため嫡出でない者を嫡出と認めることができる。

【訳註】 **segund que manda la ley**「法律の定めるところに遵い」 **segund**「～にしたがい」(現西 según)。 **apostólico**「ローマ教皇」(現西 papa, Sumo Pontífice)。 **a poder lleneramiento**「十全に権力を有する」 **a**「有する、持つ」 **aver**の直説法現在三人称単数形、 **lleneramiento**「完全に、十全に」(現西 plenamente)。

TITULO IX. DE LOS DESHEREDAMIENTOS.

LEY I.

Quando el padre o la madre quisiere desheredar su fijo o dent ayuso, nombre señaladamente la razon porque lo desheredan, o en su manda o delante testigos, e pruevela por verdadera él o su heredero, si el fijo lo negare.

第九章 相続権の剥奪について

法一

父親または母親が自分の子またはそれ以下の卑属者から相続権を剥奪するときは、遺言において、または証人の面前において、相続権を剥奪する理由を明示するものとする。子がそれを否定した場合、親またはその相続人は、その理由が真実であることを証明するものとする。

【訳註】 **señaladamente**「とりわけ、明白に、著しく」(現西 señaladamente)。

LEY II.

Padre o madre non pueda deseredar sus fijos de bendicion, nin nietos, nin visnietos, nin de alli ayuso, fuera si alguno dellos le firiere por saña o a desonrra, e sil dixiere denuesto devedado, o sil denegare por padre o por madre, o dalli arriba, o sil acusare de cosa porque deva perder el cuerpo o miembro, o seer echado de la tierra, si non fuere la acusanza de cosa que sea contra rey o contra su señorio.

法二

父親または母親は、嫡出の子、孫、曾孫、およびそれ以下の卑属者から相続権を剥奪し得ないものとする。但し、かかる卑属者のなかに親に対して、怒りによるかまたは不名誉に傷を負わせたか、禁じられている罵詈雑言を發したか、父親、母親もしくはそれ以上の尊属者として認めなかったか、または国王もしくはその支配権の利益に反する問題に関する告訴を除き、肉体もしくは四肢を失うか、または国外に追放されるべき事由となる問題で告訴した者がいる場合は、この限りでない。

【訳註】**a desonrra**「不名誉に」(現西 a deshonra)。**devedado**「禁じられた」(現西 vedado)。**acusanza**「告訴」(現西 acusación)。

Otrosi lo pueda deseredar sil yoguiere con la muger o con la barragana, o sil ficiere cosa porque pueda morir o prender lision, o si por prision de su cuerpo non le quisiere fiar, o si lo enbargar o destorvar de guisa que non pueda facer manda, o si se ficiere herege, o si se tornare moro o judio, o si yoguier en cativo, e non le quisier quitar en quanto podiere.

子が父親の妻もしくは妾と同衾した場合、子が父親に対して死亡もしくは負傷させ得る行為をした場合、父親が身体を拘束されたことにより子を信用しない場合、子が父親に対し、遺言を行い得ぬよう妨害もしくは阻止した場合、子が異端者になった場合、イスラム教徒もしくはユダヤ教徒に改宗した場合、または捕囚されている父親を子が能う限り救出しようとしなかった場合、父親はその子の相続権を剥奪し得るものとする。

【訳註】**otrosi**「また、さらに」。**yoguiere**「横たわる、同衾する」**yacer**の接続法未来三人称単数形。**prender lision**「傷を負う」(現西 tomar lesión)。**destorvar**「阻む、妨げる」(現西 estorbar)。**cativo**「捕虜(になった)」(現西 cautivo)。

Pero si por aventura padre o madre deseredar por alguna destas cosas fijo o nieto o visnieto, o dent a ayuso asi como sobredicho es, e despues le perdonare o le heredare, que sea heredero asi como era ante.

しかし、もしや父親または母親がこれらいずれかの理由により上記の如く子、孫、曾孫またはそれ以下の卑属者から相続権を剥奪した後、その子を赦し、

相続権を与える場合、その子は原状通り相続人に復すものとする。

LEY III.

Quando fijo o otro heredero por ruego o por falago a su padre o a su abuelo tuelle de facer la manda que queria facer, e facegela facer dotra guisa, non deve aver la pena que manda la ley; ca aquel deve aver la pena que por fuerza enbarga al padre o al avuelo que non faga la manda, o quel tuelle que non puede aver los testigos o el escrivano con qui faga la manda. Otrosi aya la pena quien por fuerza ficiere a padre o avuelo facer manda en otra manera que la él quiera facer.

法三

子またはその他の相続人が父親または祖父に懇願したかまたは諂って遺言を妨げ、本意と異なる方法で遺言を執行せしめたとしても、法律の定める刑罰を受けないものとする。父親または祖父に対し実力で遺言を妨げたか、または遺言に立ち会うべき証人もしくは公証人の確保を妨げた者は、処罰されるものとする。実力により父親または祖父の本意と異なる方法で遺言せしめた者もまた処罰されるものとする。

【訳註】 **falago**「へつらい、おべっか」(現西 *halago*)。 **tueller**「取り除く、妨げる」 *toller* (現西 *quitar*) の直説法現在三人称単数形。 **facegela facer**「彼にそれを行わせる」(現西 *se la hace hacer*)。 **dotra guisa**「別の方法で」* *dotra* は *de* と *otra* の縮約形。 **escrivano**「公証人、書記」(現西 *notario*) * フエロ・レアルおよび七部法典では *escrivano del rey*「国王の書記官」、*escrivano de concejo*「市会の書記官」等で用いられるほか、現代スペイン語にも南米ラブラタ地方に *escribano público*「公証人」という地域的バリエーションがみられる。

LEY IV.

Si alguno que non ovier herederos derechos ficiere su manda, e ficiere en ella heredero pariente o otro qualquier, si aquel que fizo heredero le matare despues o fuer en su muerte, o si lo matare otro e non demandare su muerte, non herede en lo suyo, e todo quanto avia de haber daquel heredamiento ayalo el rey. Et esto mismo sea en los fijos, o en los nietos, o dent ayuso. Otrosi mandamos que qui quiere que sea dexado heredero por mandado de otre que non sea fijo o nieto, o dent ayuso, si dixiere que aquella manda es falsa en que es heredero, que non aya en ella nada, e finque todo al rey quanto él devie aver.

法四

正當な相続人のいない者が遺言を行い、かかる遺言において親族者またはその他何者かを相続人に指名した場合、その後、相続人が被相続人を殺めたか、もしくは被相続人の殺害に関与したか、または被相続人が他者に殺められたのに、その殺害につき提訴しなかったならば、被相続人の財産について相続することはできず、相続財産として取得すべきであった財産は、国王が全てこれを没取するものとする。このことは、子、孫またはそれ以下の卑属者においても同じとする。子、孫またはそれ以下の卑属者でない者の遺言により相続権を委ねられた者が、自分が相続人であるとする当該遺言が虚偽であると陳述した場合、当該遺言においては何も取得せず、その者が取得すべきであった財産は全て国王に納められるものとする。

【訳註】**heredamiento**「相続、相続財産」(現西 *herencia*)。 **ayalo**「それをとる」 **aver**の接続法現在三人称単数形 *aya* の語尾に直接目的格人称代名詞 *lo* が付いたもの。

LEY V.

Porque manda la ley que el heredero, quier sea fijo quier otro, que non demande la muerte daquel de qui es heredero, non aya nada de lo que devia aver, mandamos que esto se entienda daquello que an hedat complida e que son barones, e si fuer sabido cual fue el matador, e que sea en la tierra e que sea poderoso de demandar la muerte.

法五

子であるか否かに拘らず、相続人が被相続人の殺害について提訴しなければ、取得すべきであった財産を一切取得してはならないと法律に定めていることから、これは、殺人犯が何者であったか知られている場合において、当該地に所在し、なおかつ殺害につき提訴する権能を有する成人男子について理解されるものと定める。

【訳註】**daquel de qui es heredero**「彼が相続人になっている者の、被相続人の」* **daquel** は *de* と *aquel* の縮約形。 **hedat complida**「満たされた年齢、成人年齢」(現西 *edad cumplida*)。

3. 考察

本章では、アルフォンソ 10 世の法思想、および相続に関する世俗法とカトリック教会法との関連性について考察する。

第一篇・第六章「法律およびその制定について」は、賢王アルフォンソ 10 世の法思想が如実に現れている箇所である。同王は立法者の理想として「徳による統治」を掲げ、カトリック神学からは信徳、望徳、愛徳からなる対神徳を、アリストテレス政治学からは知慮、節制、勇氣、正義からなる枢要徳を受容した。

なかでも同王の最も重視した徳目が「正義」である。人民の統一、立法事業、キリスト教の保護とともに、各人の身分と功績に応じた権利を各人に衡平に分け与えるという「配分的正義」の実現を主要な政治目標に掲げた（青砥 2017: 483-506）。『フエロ・レアル』においてアルフォンソ 10 世は、法律とはカトリック信仰、正義および善の実現に資し（法一）、立法者や法曹のみならず全人民に遍く理解され（法二）、犯罪を抑制するものであり（法三）、法の不知は恕せず（法四）、全人民が遵守する義務を負う（法五）と定める。

ところでスペイン語の ley には、人定法上の「法律」と宗教上の「戒律」という二つの意味がある。神法と世俗法が未分離の中世ヨーロッパにおいて、カトリック教会の戒律と世俗の法律との間に明確な線引きはなかった。カトリック教会の権威は、12～15 世紀に最盛期を迎え、王権の下に立たず、むしろその上または外に立っていた。その最高位であるローマ教皇は、各国の教会に訓令を発し、その効力により地方教会の慣習や法律を廃止・変更し得るほどの強力な権限を有していた。とりわけ婚姻、家族、消費貸借から発生する利息（邪利息）等は教会法により支配されていた（埴 1998: 19）。

アルフォンソ 10 世は、教会権力を抑制すべく教会の徴税権と聖職叙任権に介入したが、キリスト教国の君主としては当然ながらカトリックの教義を全面的に排除することはなく、世俗権力が容喙すべきでないとした宗教的事柄については教会法の適用を認容した。例えば『七部法典』において、教会十分の一税、婚姻、子の嫡出性、遺言執行、姦通、偽誓、異端等に関する事案については教会に裁判権を許諾している。

『フエロ・レアル』の相続法（第三篇）においてもキリスト教の強い影響がみられる。信教による制約として、ユダヤ人、モーロ人、異端者らは、キリスト教徒から相続人に指名されず（第六章・法一六）、相続人がイスラムやユダヤ教に改宗したら相続権を剥奪される（第九章・法二）。さらに、被相続人に嫡出子ないしその直系卑属がいる場合、非嫡出子の相続権が認められない（第六章・法一）。

キリスト教社会において家族とは、教会中心の共同体を形成するための最小単位である。秘蹟の一つを構成する婚姻に基づき結ばれた一組の男女が助

け合い、子どもを出産・養育する。それゆえ子の嫡出性は中世キリスト教社会の相続において極めて重大な意味を持ち、今世紀初頭に至るまで欧米諸国の民法において非嫡出子に対する法定相続分の格差が存続した⁶⁾。相続権に関する非嫡出子の格差にはこのような宗教的な背景があり、13世紀当時はそれが当然の事としてみなされていたのだが、配分的正義を重んじたアルフォンソ10世は非嫡出子の保護にも配慮し、非嫡出子に対し財産の5分の1を贈与することを認めている(第六章・法一)。

また、非嫡出子は国王の慈悲により嫡出認定を受け、国王の許可のもと相続権を付与される(第六章・法一七)。かかる国王の権限についてアルフォンソ10世は、聖職位付与を理由に嫡出認定を行い得る教皇の権限と同列に論じている。『七部法典』において、教会権力と世俗権力をして dos espadas「二本の剣」(第二部序文)と表しているが、王権は教皇の権威に服さず、むしろ教皇と並び立つ神の代理人として神から与えられた権力であり、したがって国王は教会権力から独立した権力として王国内における独占的な立法権を付与されている、と論じている(青砥2014: 131)。

前述の通り、相続権はカトリック教会の重視する子の嫡出性と密接に関わることから、仮に国王の嫡出認定権を認める本規定が適用されたならば、家族に基づくキリスト教社会の秩序を壊すおそれがあり、教会との衝突は避けられなかったであろう。『フエロ・レアル』が廃止に追い込まれた背景には、このように当時としては斬新すぎる規定を持っていたことに一因があると考えられる。

4. 結び

中世キリスト教社会において相続は、財産移転という観点から世俗法に関わる一方、当事者たる相続人と被相続人が通常家族であり、就中相続権の要件に子の嫡出性が含まれるという性質から教会法にも関わるため、世俗法と教会法の重なり合う領域に存在する。

『フエロ・レアル』の相続法は、基本的に教会法に準じているものの、単に教会法をそのまま借用したのではなく、非嫡出子のため父親財産の5分の1贈与および国王による嫡出認定を認めるなど、配分的正義を重視した賢王アルフォンソ10世の法思想が色濃く反映されている。



アルフォンソ 10 世賢王像
(筆者撮影、スペイン国立図書館)

〔註〕

- 1) アルフォンソ 10 世は El Sabio「賢王」と称される通り、学術振興に貢献した王として知られる。『イスパニア史』(Estoria de España)、『アルフォンソ天文表』(Tablas alfonsies)、『聖母マリア頌歌集』(Cantigas de Santa Maria)等の著作があるが、立法事業として『フエロ・レアル』、『エスベクロ』、そしてその発展形といえる『七部法典』の編纂を指揮した功績が大きい。シチリア、ベネチアとともに 12 世紀ルネサンスの拠点となったトレド翻訳学派(Escuela de Traductores de Toledo)を保護し、そこで古代ギリシャおよびイスラムの文献がラテン語に翻訳され、哲学、医学、数学、天文学等の知識がカスティーリャを通じてヨーロッパへと広まった。そこでアラビア語からラテン語に翻訳されたアリストテレス政治学は、賢王アルフォンソ 10 世の政治・法思想に多大な影響を与えている。さらに同王は、王国内におけるカスティーリャ語の普及にも尽力した。当時行政や外交などにおける公的な言語はラテン語であったが、世俗語を法典や歴史書の記述に用いて文章語の地位に高め、カスティーリャ語(スペイン語)の規範を確立した(寺崎 2002: 18)。『フエロ・レアル』および『七部法典』の文体は、法曹でない臣民にも理解できる平易明瞭な散文調であり、法学のみならず、中世カスティーリャの言語、社会、文化等に関する歴史を研究する上でも比類なき史料である。
- 2) 1260 年に編纂され、「鑑」を意味する『エスベクロ』は、王制の仕組みを定める最高法規性を具備し、専ら国王および宮廷裁判官により運用されたが、完成を待たずして『七部法典』に組み入れられ

た (Ayala Martínez 2002: 499)。

- 3) アルフォンソ 10 世賢王により 1256 年から 1263 年頃にかけて編纂された。スペイン法制史上最も重要な法典の一つに数えられる。その名が示す通り、7つの部 (partida) から編成され、幅広い法分野を包含する：第1部「カトリック教会」、第2部「王制、軍法、大学」、第3部「訴訟法」、第4部「婚姻法、封建制」、第5部「契約法」、第6部「相続法」、第7部「刑法」。主な法源は、ローマ法、『グレゴリウス 9 世教皇令集』および『封建法書』(Libri feudorum)である。『フエロ・リアル』と同様、諸侯・都市からの反発を受けたため、同王の治世においては発布に至らず、補助的な法源としてではあるが、アルフォンソ 11 世により 1348 年公布されるアルカラ勅令 (Ordenamiento de Alcalá) において正式な効力を得た。以後は地方特別法 (fueros) や慣習法 (costumbres) の欠缺を補充する法源に位置づけられ、カスティーリャ法の百科事典として重用された。1567 年には、七部法典の増補となる『新法令集』(Nueva recopilación) が編纂され、分離主義への対抗力として作用した。またラテンアメリカにおいては、19 世紀初頭に独立するまで、植民地行政・司法における中心的な法源として重用された。
- 4) 西ゴート王国裁判法典。フェルナンド 3 世聖王 (Fernando III El Santo, 在位カスティーリャ王 1217-1252 年、レオン王 1230-1252 年) は、カスティーリャ＝レオン王国の強力な軍を率いてコルドバ (1236 年)、ハエン (1246 年)、セビリヤ (1248 年) 等の主要都市をつぎつぎと奪回した後、イベリア半島の統一キリスト教王国の象徴とみなされていた西ゴート王国の裁判法典を王国共通法として採用することを試み、ラテン語で書かれた同法典をカスティーリャ語に翻訳し、独自の修正を施した上、『フエロ・フスゴ』(Fuero Juzgo) と称して 1241 年に発布した。なお、『リベル』と『フエロ・フスゴ』は同一視されることがしばしばあるが、両者の内容は必ずしも同一でなく、運用されていた時代も異なるため、厳密には区別されるべきである (中川 1996: 93-114)。
- 5) 1120 年、アラゴン王、アルフォンソ 1 世武人王 (Alfonso I El Batallador, 1073-1134) によりソリアに授与された。1119 年、ソリアの統治に着手した同王は、民会を整備し、ソリア市民が国王の權威に服するよう、この都市法を制定した。この民会統治モデルは、アンシャンレジームが終結するまで存続した。
- 6) 非嫡出子に対する法定相続分の格差に関する規定は、1998 年ドイツ、2001 年フランス等において廃止の法改正が行われた結果、今日の欧米には見られない。フランス・ドイツの民法の影響を受けたわが国においても、法定相続分を定めた民法の規定のうち非嫡出子の相続分を嫡出子の相続分の 2 分の 1 と定めていたが、90 年代以降国連から格差是正を繰り返し求められ、最高裁判所大法廷平成 25 年 9 月 4 日決定により違憲判決が下され、さらに同年 12 月 5 日、民法の一部を改正する法律が成立し、非嫡出子と嫡出子の相続分が同等になった。

〔参考文献〕

- 青砥清一「七部法典におけるアルフォンソ 10 世の王権思想について：ローマ法学とアリストテレス政治学の継受」『神田外語大学紀要』26, 2014, pp.117-138.
- 青砥清一「七部法典における徳による統治と正義について―関連法文の対訳と註釈―」『神田外語大学紀要』29, 2017, pp.483-506.
- 青砥清一・相澤正雄（編・共訳）『七部法典 I』日比谷出版社, 2019.
- 青砥清一・相澤正雄（編・共訳）『七部法典 III』日比谷出版社, 2019.
- 埴浩（訳著）『ラテンアメリカ法史・イスラム法史』（原書 Karst, Kenneth L., *Historical development of Latin American legal institutions*）信山社出版, 1998.
- 寺崎英樹「アルフォンソ 10 世『イスパニア史』における動詞形式とその機能」『東京外国語大学論集』62, 2002, pp.17-34.
- 中川和彦「フエロ・フスゴの素描―ラテンアメリカ法講義覚え書」『成城法学』51, 1996, pp. 93-114.
- 山田信彦『スペイン法の歴史』彩流社, 1992.
- Ayala Martínez, Carlos de, “Capítulo 23 La consolidación de las monarquías peninsulares”, *Historia de España de la Edad Media*, Álvarez Palenzuela, Vicente Ángel (coord.), Ariel Historia, 2002, pp. 497-516.
- González Jiménez, Manuel, *ALFONSO X el Sabio*, Ariel, 2004.
- Pérez Martín, Antonio, “Estudio preliminar”, *Fuero Real*, 2005, pp.XII-XVIII.
- Sainz Guerra, Juan. *Historia del derecho español*. Dykinson, S.L., 2008.
- Vinogradoff, Paul, *Roman Law in Medieval Europe*, Harper & Brothers, 1909.